

# 【論評】アメリカ保守研究と トランプ時代における歴史家の役割

<Commentary> Understanding the American Right:  
The Role of the Historian in the Era of Donald Trump

関口洋平

SEKIGUCHI Yohei

本稿は2017年6月2日に立教大学で行われたリサ・マクガー氏の研究会「Understanding the American Right: Has Trump Proved Historians Wrong?」に関するレポートまた考察である。トランプ現象の示していることは何か、また歴史家はトランプ時代にどのような役割を果たすべきなのか。一見単純に見えるこれらの疑問に対し、マクガー氏は示唆に富んだ議論を繰り広げた。以下に講演会の概略を記し、最後に筆者の意見を簡潔に付け加えたい。

アメリカ保守主義研究の第一人者であるマクガー氏の『郊外の戦士たち (Suburban Warriors)』は2001年に出版された。(新)保守主義を支持する人々の視点から歴史を再構築しようとするアプローチはそれほど一般的ではなかったが、多くの研究者がマクガー氏に追随し(新)保守主義の実像を探りはじめた。ところが、ドナルド・トランプというポピュリスト(またはナショナリスト)は、マクガー氏を始めとする歴史学者たちが作り上げてきた(新)保守主義者のイメージにはそぐわないように思える。では、新保守主義／新自由主義というイデオロギーは、もはや時代遅れになってしまったのだろうか？

マクガー氏が述べるように、従来の新保守主義／新自由主義の理想を覆したためにトランプが大統領に選ばれたのは確かである。反グローバリゼーション、反エリート、インフラ投資といったトランプが掲げるスローガンは、20世紀後半に共和党が躍進する原動力となった「大きな政府の解体」という基本的な政策とは相容れない部分が多い。また、白人至上主義を前

面に打ち出してこなかった共和党の政策をトランプは根底から覆そうとしている。

長年にわたり米国の保守主義を考察してきたジャーナリストのリック・パールスタインは、トランプの勝利は全く予期しえない事態であったと率直に述べている<sup>1</sup>。マクガー氏はパールスタインに一定の理解を示しながらも、より洗練された見解を披露する。トランプ大統領の誕生は確かに予期できない事態ではあったが、そのことが示唆しているのは新自由主義の抜本的な変化というよりはその再編だというのである。グローバル・エリートと労働者階級の新自由主義的な連合が40年以上にわたり抱えてきた矛盾が一举に噴出したためにトランプは躍進した、というのが彼女の基本的な理解である。

マクガー氏によれば、彼女が『郊外の戦士たち』を発表した2001年の段階では、リベラリズムこそがアメリカの未来であるというコンセンサスが根強く、新保守主義の台頭の理由を歴史的に考察した研究は少なかった。ライオネル・トリリングによるリベラル論に代表されるように、保守主義とは前時代的な専制主義の遺物であるとして蔑視されることが多かった<sup>2</sup>。保守主義は近代化していくアメリカ社会が産み落とした鬼子のような存在として理解されており、偏見を抜きにして保守主義の実像を追求した研究は稀であったのである<sup>3</sup>。例えば、1964年の大統領選におけるバリー・ゴールドウォーターの躍進を目の当たりにして、リチャード・ホフスタッターはこのように問いかけた——「アメリカの歴史において、こんなにも時代遅れで、混乱していて、一般的なアメリカ人の常識からかけ離れた男がこのような成功を収めたことがあったらどうか<sup>4</sup>？」ゴールドウォーターが掲げていた政策は、今日的な観点から言えばさして極端なものではなく、むしろ共和党主流派の理想に近いものがある。にも関わらず、当時の知識人は彼の理念を時代遅れで反動的なものであるとして一蹴し、真剣に考慮しなかったわけである。

そのようなギャップを埋め、新保守主義の実像を探るべく、マクガー氏のような研究者たちは新保守主義者が単に回顧主義的であるというステレオタイプを修正し、新保守主義を支持する一般大衆の観点から歴史を理解しようと努めてきた。20世紀後半は、それまで前景化されてこなかった黒人、女性、労働運動、家族、等々を中心にして歴史・社会学が再編された時代で

あった。1960年代における新保守主義者というのは、まさにそのような存在の一つであった。リベラリズム全盛の時代において新保守主義を支持した人々は、前時代的な理想を掲げる専制的な政治家に騙された操り人形のような存在であったのか？彼らを中心にして歴史を書き換えるならば、アメリカという国家に関する理解はどのように変化するだろうか？従来の歴史では黙殺されてきた草の根運動としての新保守主義に光を当てることによって、マクガー氏はそのような疑問を提示したのである。

新保守主義が無知蒙昧で時代錯誤的な大衆により支えられているという固定観念を覆し、彼らがフリードリヒ・ハイエクやミルトン・フリードマンといった経済学者に強い影響を受けていることをマクガー氏は示した。彼らは市場における自由を支持する一方で、その成果を政府が再配分することには強く反対した。(経済的な)「自由」と(政治的な)「正義」とは別物である、というのが彼らの哲学である。この点は極右の政治団体と考えられがちなジョン・バーチ協会にも共通している。これらの新保守主義者たちは単に古き良き時代を懐かしんでいたわけではなく、未だ実現されていない究極の理想を謳いあげることにより、リベラリズムの脅威に対抗しようとしていたのである。

これらの新保守主義者の目標は、個人主義や自助努力というアメリカ的な伝統を新しい形で蘇らせることであった。マイノリティーたちに「権利」を与えることを目標としたリベラリズムは、その矢面となった。1964年の大統領選挙における新保守主義の成功は限定されたものであったが、1970年代に入り公民権運動の行き過ぎが批判され「サイレント・マジョリティー」の存在がにわかに注目を集めるにつれ、新保守主義の勢力は地滑りのように拡大した。

マクガー氏を始めとする研究者たちによって、以上のような新保守主義の歴史は様々な角度から分析されてきた。ところが、トランプ大統領の誕生という現象はこのような歴史によっては説明されえない。新保守主義は近年、リベラリズムの目指す正義・平等を部分的に受け入れ、LGBTQなどマイノリティー集団の権利を部分的に擁護しながら勢力を拡大してきた。その一方、白人労働者階級男性が「集団」として見なされ彼らの権益が政治的議論

の俎上に載せられることは稀であった。そのような風潮に公然と反旗を翻してみせたのがトランプだ、というわけである。

また、より重要なのは、1980年代以降リベラル・保守の枠組みを超えて広く支持されてきた新自由主義というイデオロギーにトランプが異議を申し立てたということである。民主党も共和党も経済的な格差が著しく拡大していくことに危機感を覚えることはなく、むしろエリート層が権益を拡大していくことを積極的に手助けした。このような傾向に1998年の時点で警告を与えていたのはリチャード・ローティである。『アメリカ未完のプロジェクト』のなかで彼はこのように述べている。

労働組合のメンバーや労働組合に加入していない未熟練労働者は、賃金の下落や雇用の海外流出といった事態を自国の政府が傍観していることをそのうちに知るだろう。また同時に、労働組合のメンバーと未熟練労働者は、郊外に住むホワイトカラー——彼ら自身もリストラされることをひどく恐れている——が、社会保障手当のために課税されたくはないと思っていることに気が付くはずだ。その時点で何かが壊れるだろう。郊外に住むことのできない有権者は、制度が破綻したと判断し、投票すべき有力者——独善的で狭量な官僚、狡猾な弁護士、高給取りの投資家、ポストモダニズムの教授などによる支配の終わりを約束するような者——を捜し始めるだろう……そのとき起こるのは、この四十年間に人種マイノリティーや同性愛者が勝ち取ってきた権益が帳消しになるということである……大卒の人間が自分の取るべき態度を指図することに対し、教育を受けていないアメリカ人は憤りを感じている。その憤りは、はけ口を見出すことになるであろう<sup>5</sup>。

この引用からわかるように、白人労働者階級による逆襲とポピュリスト的な政治家の台頭をローティはかなり正確に予測していたのである。労働者階級の白人男性がエリート層に抱いている憤りこそが政治を動かす原動力となることを彼は見抜いていた。

アメリカを代表する哲学者がこのような予見を示していたのにも関わらず、歴史家たちがトランプの躍進を予期できなかったのはなぜだろうか？ マクガー氏はその反省をもとに、いま歴史家たちが焦点を当てるべき四つのポイントを示して講演を締めくくる。アメリカにおける反民主主義の伝統、現

代という時代の特異性（経済的な不安）、トランプ支持者たちの社会文化的な背景、法と秩序の再強化（産獄複合体）である。トランプ大統領が体現する新たな保守主義をより良く理解するために、これらの側面を複合的に検討することが歴史家にとっての喫緊の課題であるとマクガー氏は述べた。

コメンテーターの宮田伊知郎氏からは、マクガー氏による郊外史研究を踏まえたうえで、20世紀後半以降のアトランタの地政学的な変遷——「郊外の戦士たち」の後日談——をどのように理解するべきか、またそれを今日のトランプ現象とどのように関連付けるべきかという問題提起がなされた。宮田氏はまず、1967年から1971年にアトランタの市長を務めたレスター・マドックス（Lester Maddox）の政治哲学を概観する。マドックスは1960年代後半においてなお人種隔離政策を支持し、自らの経営するレストランに黒人を顧客として迎えることを公然と拒んだ。宮田氏は（『郊外の戦士たち』に描かれる白人中流階級のように）彼が「私有財産権」また「自由市場」を守るという名のもとに人種差別を正当化していたことを指摘する。

マドックスがビジネス・エリートやジャーナリストの「欺瞞」を事あるごとに問題としていたことも今日的な観点からは興味深い。マドックスによれば、彼のレストランでは少なくとも黒人を労働者としては歓迎していた。彼を攻撃する新聞社に黒人のジャーナリストがほとんどいなかったのとは対照的である。

宮田氏はマドックスの憤りをトランプ時代の白人労働者階級の怒りに重ね合わせてみせる。2016年の白人労働者は、自分たちが人種差別的であるという批判そのものに憤りを覚え、それがリベラルなエリートたちの作り上げた「偽ニュース」であると考えていたのではないかと。例えば近年、リベラルな白人エリート層はジェントリフィケーションという形でアトランタの都心に回帰している。彼らはダイバーシティを表面的には重視する一方で、実際のところは黒人ばかりか白人労働者たちをもコミュニティから締め出している。もしマドックスがこのような光景を目の当たりにしたならば、彼は一体何と言うだろうか？マドックスや彼の父親が働いていた製鋼所はいま、最先端のショッピングモールになっているのである。現代アメリカ社会が人種のみならず階級により分断されていることはおそらく、彼にとって予想外の

事態であつたらう。マドックスは、現代白人労働者たちとともに怒り狂うのではないか。

宮田氏の指摘が重要なのは、マドックスと「エスタブリッシュメント」の対立を前景化する中で、歴史家の立ち位置を自戒的に問い直すからである。マドックスのような人間そして白人労働者を人種差別的であるとして「上から目線」で断罪することにはどのような意味があるのだろうか？ダイバーシティを重んじるリベラルと人種差別的な保守という単純な図式を歴史家たちは作り上げてこなかっただろうか？「エスタブリッシュメント」が歴史を独占することに問題はないのだろうか？宮田氏はマドックスという保守的な政治家を主体として歴史を再考することにより、歴史家のイデオロギーそのものがトランプ現象に与えた影響を示唆しているわけだ。

おそらくこのような問いは、『郊外の戦士たち』の出版以降、アメリカ保守の歴史を研究する者が幾度となく直面してきたものであるはずである。宮田氏の問いかけに対し、ニューディール・リベラリズムの普遍的な理想が失われたのはなぜか、リベラリズムのあるべき姿とは何かを考えることが急務なのではないかとマクガー氏は応答し、ディスカッションを総括した。また、その後の質疑応答で活発に意見が交わされたことも付け加えておきたい。

マクガー氏が本講演において提示した歴史的な枠組みは「トランプ現象」を考えるために基本的には有効である、と筆者は考える。マクガー氏のような歴史家が研究の対象としてきた新保守主義者たちとトランプの間に断絶を見るのか、それとも連続を見るのか——そのことこそが議論の出発点となるべきであろう。マクガー氏の言うように、確かにトランプの閉鎖的な姿勢は市場開放を指向し「エスタブリッシュメント」の権益を拡大する新自由主義とは相容れない部分が多い。しかしながら、トランプと新自由主義との距離はそこまで大きいのだろうか？「トランプ大統領の誕生が示唆しているのは新自由主義の抜本的な変化というよりはその再編だ」と述べる時、マクガー氏はそのことを問題にしているように思える。ただし、時間の都合もあり、その点が講演のなかで十分に深められなかったのは残念であった。

トランプと新自由主義の関係を整理するために一つの補助線となりそうなのが、ウェンディ・ブラウン (Wendy Brown) の新自由主義に関する議論

である。『いかにして民主主義は失われていくのか』という近著の中でブラウンは、新自由主義の本質とは市場のモデルを人間活動の全ての領域に適用しようとすることであると述べ、新自由主義が浸透するにつれて民主主義が衰退していく事情を説明している<sup>6</sup>。トランプは「誰よりも有能なセールスマン」であるから大統領に選出されたのではなかったか？トランプが選出されたこと自体、大多数のアメリカ国民が市場のレトリックを受け入れ、民主主義に見切りをつけたという証左なのではないだろうか？

ブラウンは最近のインタビューの中で、トランプの躍進を新自由主義の終焉として解釈することに警鐘を鳴らしている<sup>7</sup>。トランプの志向するファシスト的な姿勢はハイエクやフリードマンといった新自由主義を立ち上げた経済学者たちが最も恐れていたものであった、と断ったうえでブラウンはこのように述べる——我々がいま目撃しているのは、新自由主義が生み出した「フランケンシュタインの怪物」なのである、と。おそらくここで、マクガー氏とブラウンは同じことを述べているはずである。「保守」を時代錯誤的な反動勢力として一括りにしていたのでは、トランプ現象は説明されえない。そして、だからこそ「歴史」がいま必要とされるのではないか？トランプという「怪物」はいつどのようにして生まれたのか？新自由主義はどのようにして変質したのか、「何かが壊れた」のはいつだったのか？もちろんそれらの問いに答えるためには、宮田氏が示唆するように歴史家自身の立ち位置をも考慮する必要があるだろう。それは容易な仕事ではないはずだが、いずれにせよ、トランプ以後の「歴史」の在り方を考えさせるという意味で本講演は非常に意義深いものであった。

## 註

<sup>1</sup> Rick Perlstein, "I Thought I Understood the American Right. Trump Proved Me Wrong." *The New York Times Magazine*, April 11, 2017, <https://www.nytimes.com/2017/04/11/magazine/i-thought-i-understood-the-american-right-trump-proved-me-wrong.html>.

<sup>2</sup> Lionel Trilling, *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society* (New York: Viking Press, 1950).

- <sup>3</sup> Alan Brinkley, "The Problem of American Conservatism," *The American Historical Review* 99, no.2 (April 1994): 409-429.
- <sup>4</sup> Richard Hofstadter, "A Long View: Goldwater in History," *The New York Review of Books*, October 8, 1964, <http://www.nybooks.com/articles/1964/10/08/a-long-view-goldwater-in-history/>.
- <sup>5</sup> Richard Rorty, *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America* (Cambridge: Harvard University Press, 1999), 89-90. 翻訳に際し、以下の既訳を参考にした。リチャード・ローティ『アメリカ未完のプロジェクト——20世紀アメリカにおける左翼思想』小澤照彦訳（晃洋書房、2000年）。
- <sup>6</sup> ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』中井亜佐子訳（みすず書房、2017年）。
- <sup>7</sup> Samuel Burgum, Sebastian Raza, and Jorge Vasquez, "Interview with Wendy Brown: Redoing the Demos? An Interview with Wendy Brown," *Theory, Culture & Society*, June 8, 2017, <https://www.theoryculturesociety.org/interview-wendy-brown/>.